

母と娘 : ベルナノスとバルベール・ドールヴィイ

野村, 知佐子

<https://doi.org/10.15017/16857>

出版情報 : Stella. 28, pp.109-118, 2009-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :



母と娘

——ベルナノスとバルベー・ドールヴィイ——

野村知佐子

ジョルジュ・ベルナノスは、処女作『悪魔の陽の下に』（1926年）の出版直後に行われたフレデリック・ルフェーブによるインタビューのなかで、バルベー・ドールヴィイにたいする共感をこめて次のように語っている——「偉大なるバルベーが猫を被った吸血鬼たちをどのような境遇においたか、考えてみてください。レオン・プロワがみごとに指摘したように、『魔性の女たち』の作者は最も強く、最も完璧な魂をとりあげているのです。彼はそうした魂のなかに、喉までいっばいに、地獄の情念を注ぎこみました¹⁾。じじつ、「最も強く、最も完璧な魂をとりあげた」ふたりの作家は「悪は女衞や淫売婦のなかに効果的に観察できるのだという、素朴で驚くべき幻想」を遠ざけた。本稿はバルベー・ドールヴィイの『名前のない物語』（1882年）とベルナノスの『田舎司祭の日記』（1936年）を取りあげ、それぞれの作品に見られる母と娘との関係のなかに、ふたりの作家の類似点と相違点を見いだす試みである²⁾。

*

『名前のない物語』にはフェルジオル男爵夫人とラストニーという母娘が登場する。物語が始まる時点で、夫であり父親であるフェルジオル男爵はすでに夭折している。男爵が後に彼の妻となったジャクリーヌ・ドロンドを略奪した思い出は、夫の死後敬虔な女性となった彼女に、愛の力にたいする限りない怖れと尽きることのない罪悪感を吹き込む。それが同時にラストニーにたいする母としての態度を決定させる——

フェルジオル男爵夫人は、娘にたいして抱いている自分の思いに確信があった。それ

だけで彼女には十分だった。彼女は神の前での功德とは、ひたすら満ち溢れることを願う優しさの本流を押しとどめることにあると思っていた。しかし彼女は自分の思いを押し殺すことによって同時に（彼女はそれを知っていたのだろうか？）、娘の思いまでも押し殺してしまっていたのである。[B. 279]

母の態度はまた、彼女にたいする娘の態度をも決定させる。こうして互いに深く愛しあいながらも、その感情をけっして吐露することのないひと組の母娘が誕生することになる。これにたいして『田舎司祭の日記』の伯爵夫人とその娘シャンタルとの関係はいかなるものであろうか。夫人は娘への思いを司祭にたいして吐露する――

それにしてもあの娘はなんて上手なんでしょう！ この言葉はあなたにはきっと奇妙に聞こえるでしょうね？ 娘は成人に達してはじめて女になるとあなた方はお思いでしょう？ 神父さんはたいいてい単純でいらっしゃいますものね。子猫が毛糸の毬にじゃれているとき、鼠を思っただうか知りませんがちゃんとやるだけのことはやっていますわ。殿方には愛情が必要だと申しますし、そのとおりかもしれません。でもその愛情の種類ですけれど、それはただひとつ――それ以外にはありません――その男の人の性質にあった愛情、そのためにその人が生まれてきたような愛情なのです。真心なんて問題ではありません。[1150]

こうして彼女は、自分の家の主とは娘にほかならず、自分は互いに理解し、愛しあう父と娘の間で単なる傍観者の立場に甘んじなければならないことを痛感する。シャンタルもまた、父を愛するあまり、彼を理解せぬ母を心の底で軽蔑し疎ましく思う。こうしてここに、傍目にはそのそぶりこそ見せぬものの、赤の他人のように生きるもうひと組の母娘がある。このようなふた組の母娘のうち、前者にはリキュルフという名のカプチン僧が、そして後者にはアンブリケールの司祭が介入することとなる。では司祭の介入によってそれぞれの母娘に何がもたらされるのであろうか。

四旬節の説教のためにフェルジヨル男爵夫人の城に逗留したカプチン僧リキュルフは、その非の打ちどころのない所業によって周囲の人々に畏敬の念を抱かせる。しかしマグダレーナ・ヴァンジオッチが指摘するように、彼はバルバー・ドールヴィイの描く人物像の典型である〈禍の人〉として、それまで危うい均衡を保ちながらも平安であった小世界の破壊者として登場するのである³⁾。彼はフェルジヨル男爵夫人の作りあげた小世界を前にする。社会から孤立して

生き、深く娘を愛しながらも、神への敬虔の念からその思いを押し殺して生きる母は、娘にもその感情的な捌け口を与えなかった。その結果は次のようなものである――

しかし過去をもたず、感じやすい生にたどりついたラストネー、まだ眠ってはいるがじきに目覚めるであろう知性のほころびにたどりついたラストネーにとって、その孤立感は母親の感じるそれよりも深いものであった。じっさい彼女は、苦痛に苦しむというより不快に苦しむようにしてその孤立感に漠然と苦しんでいたのである。なぜなら彼女の内部ではすべてがまだ曖昧であったためである。やがてそれははっきりしてくるであろうが…… [B. 280]

ラストネーの内には発散されるべきエネルギーが渦巻いている。にもかかわらず、彼女はそれを発散するための外部の対象に恵まれていない。長い年月捌け口をもたずにいた彼女の内なるエネルギーはほんの些細な出来事で奔流となって流出せずにはおかないだろう。ラストネーの内なるエネルギーの象徴ともいうべき夢遊病の発作は、彼女が破局と表裏一体であることを示すものである。この限界状況にリキュルフはその身を投じる。彼は発作中の彼女を強姦し、受胎させる。覚醒と眠りの中間に位置するこの病のさなかでなされたラストネーの受胎は、意識の不在という点において処女懐胎の名に値するといえよう⁴⁾。そしてまさしく処女懐胎であるからこそ、彼女は、苛烈さを募らせる母親の追求にたいして何も答えることができないのである。しかるにこのラストネーの沈黙に男爵夫人は昔の自分の姿を重ね合わせる――

「もしラストネーが自分のしたことを知っているなら、あの子はそれについて黙し、自分の気持ちを隠しているということだ。悪は根深い」と彼女は独りごとを言った。彼女はかつて自分が恋した時、その気持ちをおし隠していたことを思い出した。愛というこの凶暴な恥じらいはすぐさまにべもなく嘘に変わる。それももっとも甘美な唾棄すべき嘘に。 [B. 305]

しかしながら同時に、ラストネーが固く口を閉ざしているのは彼女の愛がそれだけ深いからだと言爵夫人は密やかな共感を抱く。娘への憐みの念に駆られて母は自らの秘密であった父との馴れ初めを語って聞かせもする。だがなんとかして娘の秘密を聞き出そうという母親の努力が徒労に終わることは断るまでもない。なぜなら秘密というものがそもそも娘には存在しないからである。作中か

らはラスステニーの内的独白はいうまでもなく、その内面描写すら影を潜め、すべてはフェルジョル男爵夫人の懊悩に満ちた視線の下に物語は展開する。

一方、アンブリケールの司祭はベルナノスの描く人物のなかでも、子供時代の聖性を受け継ぐ典型的な人物である。彼はシャンタルからその家庭の秘密である父の不実について聞く。シャンタルはパリへ逃れて身を汚した後、「これがあなたの私になさったことです」[1136]と父親に手紙を書くつもりであると彼に打ち明ける。しかし司祭は彼自身にも定かではない力によってその言葉の背後にあるものを読みとる――

私にはその唇の上に、彼女が口にしない言葉がしだいに読み取れるような気がしていたが、そのもうひとつの言葉は、ひとつひとつ、私の脳裏に焼けつくように刻み込まれていった。私は思わず叫んでしまった。「あなたはそんなことはなさいません。あなたが誘惑されているのはそんなことにはありません。私にはわかるのです！」彼女は激しく震えだし、両手で壁に寄りかからずにはいられなかった。[1136-1137]

司祭が彼女のなかに読みとったものは、自殺への意志だったのである。限界状況下にいる娘を救うべく、彼は伯爵夫人をたずねる。が、夫人もまた娘のなかに自殺への意志を読み取っており、それにもかかわらず、故意に何の手だても講じようとしないうでいるのだった――

「私は主人の意志を実行します。もしも主人がまちがっていたら。ああ！主人は、娘が自分のところへ帰ってくると信じているのです。」[…][「で、奥様、あなたもそう信じていらっしゃるのですか？」と私は聞いた。ああ！夫人は頭をのけぞらせた。そして私は見たのだ――いかにも見たのだ――稲妻のように、真実の告白が夫人の仮借ない魂の深みから思わず浮かび上がってきた。嘘の真っ只中でとらえられた眼差しは「はい」と答えていたが、今、抑えがたい内心の衝動が半ば開いた口から「いいえ」という言葉を投げていた。[1155-1156]

ここで司祭は、目で偽りを語りながらも口では抑えがたい衝動に駆られて真実を言わずにはおられぬもうひとつの限界状況に直面する。伯爵夫人は互いのために作られたような父と娘の間に長い年月を疎外感のうちに生きてきたこと、夫の数々の不実に耐え、しかも最愛の息子を失うという悲しみのなかにいたことを司祭に告白する。しかしこうした数々の不幸にもかかわらず、彼女は非の打ちどころなく生きてきたこと、また神にたいする義務を何ら怠たらなかった

ことを聞かされた司祭は、伯爵夫人にたいして次のように言う――

奥様、どんな冒涇の言葉だって、そのような言葉よりましです。あなたの口を通るその言葉には地獄のあらゆる冷たさがあります。[1160]

このようにしてアンブリケールの司祭は限界状況のもとにある母娘に介入していく――

一時間前まで私の生活はきちんと秩序だっているように見えました。それぞれのものはみなその場所にありました。それをあなたは、何もかもすっかり覆しておしまいになりました。[1163]

リキュルフが母娘の危うい均衡を保つ小世界を破壊したように、アンブリケールの司祭もまた、伯爵夫人の「きちんと秩序だった」世界の破壊者として存在する。ではふたりの司祭の介入は母娘に何をもたらしたか。ラストニーは18本のピンを心臓の周辺につきたて、出血するにまかせて緩慢な自殺を遂げた。この自死の直接の原因が絶望にあるのか、自らの無垢にたいする固執にあるのか、あるいは無情な母親にたいする精いっぱい抵抗なのか、物語のなかから判断を下すことはできない⁵⁾。だがその原因をなすものがリキュルフの介入であることは明白である。一方、アンブリケールの司祭との決定的な対話の夜、伯爵夫人は心臓発作で命を落とす。トルシーの司祭の指摘のように、アンブリケールの司祭との緊迫した一幕が彼女の心臓にとって致命的であったとすれば、リキュルフは娘に、アンブリケールの司祭は母親に死をもたらしたことになる。このように、小世界に閉じこもる母と娘の関係に司祭が介入し、ともに死がもたらされるという点で、ふたつの物語は共通した構造をもつ。では逆にふたつの物語を隔てる要素とは何なのか、それを以下に検討しよう。

*

ふたつの物語の相違点に移る前に、その相違点を際立たせるため、ひとつの機能について論じなければならない。それは赤ん坊の死という機能である。『名前のない物語』において、リキュルフの介入によりラストニーは妊娠する。赤ん坊の胎内での動きはその不条理さにおいて娘には絶望を、母親には娘の穢れ

についての残酷な確証を与える。「流産してくれたら」[327]と願っていたフェルジョル男爵夫人にとって幸いなことに、もたらされた子供は死産児であった。夫人は神の摂理に感謝する――

彼女は、もし生きながらえていたなら、心のなかで陰鬱にもトリスタンという名を与えていたその子供が失われたことを神に感謝した、そして生まれる前にその命を奪った摂理を褒めたたえた。まるで摂理が娘同様彼女にも、他の恥辱、他の苦痛を免れさせてくれたかのように。[B. 335]

残酷な欲びに突き動かされて、夫人はラストニーに子供の遺骸をつきつけながら「これがお前の罪とその贖罪です」と言う。娘は「その子は私より幸せだわ」[B. 335]と言ったきり、ひとかけらの愛情も赤ん坊にたいして示そうとしない。赤ん坊の死体は、まるで自分が殺害したようだという意識に苛まれる夫人の手によって城の庭園の一角に葬られる。このように『名前のない物語』において赤ん坊の死は物語の不条理性、すなわち名づけようのないことを強調するだけで、なんらポジティブな機能を果たしていない⁶⁾。他方『田舎司祭の日記』の伯爵夫人には一年半しか生きなかった息子がいた。その息子の死によって悲しみのあまり彼女は神を呪い、あらゆるものに心を閉ざして生きつづけてきた。アンブリクールの司祭は、息子を愛しているのなら愛のない状態に身をおいてはならないと説得し、彼女を神と対峙させることによって、失われていたその絆を取り戻させる。その体験は司祭への手紙のなかで次のように綴られる――

小さな子の絶望的な思い出が、私をすべてのものから遠ざけ、恐ろしい孤独のうちに留まらせておりました。ところがもうひとりの子供が、私をその孤独から救いだしてくれたような気がいたしております。あなたをこんな風に子供扱いして、傷つけようと思っているわけではありません。でもやっぱりあなたは子供です。神様があなたをそのままにしておいてくださいますように、永久に！ [1165]

伯爵夫人を絶望に陥れたひとりの子供の死を、もうひとりの子供であるアンブリクールの司祭が贖うのである。『名前のない物語』において何ものももたらさぬどころか、物語の不条理性と残酷さを際立たせる役割しか果たさなかった赤ん坊の死は、『田舎司祭の日記』において絶望から救済への変容を象徴するものとなる。

さて先述したとおり、ふたりの司祭は母娘の棲む小世界の破壊者として機能

し、その結果死がもたらされるのであるが、赤ん坊の死のイメージに見られるように、その介入の意味合いは対照的である。フェルジョル男爵夫人とラストニーは互いに愛し合っており、夫人はリキュルフに邂逅する以前は非常に敬虔であった。リキュルフとの邂逅の後も、フェルジョル男爵夫人はラストニーを追い詰めたその恐るべき敬虔さを失わなかった。しかし彼が回心し、トラピスト修道院で聖人のように生き、そして死んだことを聞かされたとき、初めて彼女の心に神にたいする疑惑と反抗が芽ばえる。「もし彼が天国にいるのなら、彼と一緒に天国など真平です」[B. 362]と語る彼女は、崇高な態度で告解を拒んだまま命を閉じる。リキュルフは夫人から信仰すら失わせたのである。これにたいしてアンブリクールの司祭は、伯爵夫人とシャンタルという互いに憎しみ合った母娘に介入し、神への無関心のなかで生きてきた夫人を神と対峙させ、ついには和解へと導く。また、もしも人生が自分を欺くのならば、復讐し、悪にたいして悪をなしてやるというシャンタルにたいして、司祭はその時こそ彼女は神を見出すであろうと語る。リキュルフが母娘の棲む小世界に潜在的に存在していた絶望を露わにし、その世界を完全に破壊してしまうのにたいし、アンブリクールの司祭は母娘の棲む小世界を破壊することによって、それを神に向けて開く働きをするのである。

次に見なければならぬのはコミュニケーションの有効性である。フェルジョル男爵夫人が娘を熱愛しながらもその愛情とは裏腹に娘のあやまちをひたすら攻めつづけ、ふと憐みの念に駆られて娘のために自分の過去のあやまちを告白するも、そのとき娘は母の思いが届かぬ状況にある。母親の薰陶どおり、感情を押し殺したままの少女でありつづけたせいなのか、あるいは己の生のあまりの不条理さに表現手段さえ奪われたせいなのか、ラストニーは母親と何の対話も持たぬままに死んだ。娘の受胎についての真相を知ったとき、母の愛は彼女を死に追いやったリキュルフへの憎悪に変わる。そしてリキュルフもまた彼の犯した罪の動機について何も語ることはない。フェルジョル男爵夫人がこの恐ろしい事件について彼と言葉を交わす前に、すでに墓穴に横たわる身となっていた。こうして三者の間に対話は成立しない。まるで各人が秘密というものを持たぬかのように、打ち明け話がないという意味において『名前のない物語』は本質的に沈黙の劇であって、そこに見られるのは徹底したコミュニケーションの不在であり排除である。彼らの間に交わされる言葉は互いを理解させる動

因となるどころか、却って彼らの孤独を深めさせ、コミュニケーションの不可能性を際立たせるものである。一方『田舎司祭の日記』において、アンブリカールの司祭に係るのは各々秘密を抱いた人間であり、幻視ともいべき直観的能力によって彼はその秘密に肉迫していく。だが神との和解の直後に死んだ夫人とその娘との間にはついにコミュニケーションが成立することはなかった。しかしながらアンブリカールの司祭が夫人との対話のなか、「目に見えぬ裂け目のようなもの」[1162] から平安が満ち溢れ、彼と夫人とを包むように感じたその同じ瞬間、司祭と夫人の対話を盗み聞きしていたシャンタルは母親の秘密をつかんでいる。秘密の伝達がコミュニケーションのもつ機能のなかで最も本質的な要素だとすれば、娘にとって母から伝わるべきものは伝わったのだといえよう。じじつその結果として、シャンタルの心が、まだ彼女が認識していなかった母親への愛を感じたのはこの時ではなかっただろうか――

私はあなたが母と話していらっしゃるとき、窓の下に隠れていました。ふいに母の顔がいかにも、いかにも柔和になったのです！ そのとき私はあなたを憎みました。[1227]

シャンタルが司祭にたいして抱いた憎しみは、彼にたいする激しい嫉妬の表れであり、彼女の母親にたいする愛と表裏一体なのではあるまいか。以上のように『名前のない物語』に見られるのがコミュニケーションの不可能性であるとき、そこには秘密に踏み込めぬ絶対的な不透明さがある。これにたいして『田舎司祭の日記』に見られるのはコミュニケーションの絶対性であり、そこでは秘密は驚くほどの透明さで立ち現われてくるといえよう。

*

アルベール・ベガンは、バルナノスの『田舎司祭の日記』の「罪の世界とはちょうど暗くて深い淵に映る景色の影のように、恩寵の世界と相対しているのです」[1139] という文は、バルベール・ドールヴィイの『ホイスト・ゲームのカードの裏側』の「地獄とは窪んだ空のことです」という一節にたいする説明ともいえるほどに、両者は類似点をもつと指摘している⁷⁾。一方、「換気口から覗き見た地獄の方が、仮に一望のもとにその全体像を眺めたときよりも、恐ろしいにちがいないと思うからだ」⁸⁾ という言葉にしたがって、バルベール・ドールヴィ

イが全てを語りつくさぬという技法を用いて、謎に満ちているがゆえに恐ろしい作品世界を展開させたのにたいして、地獄を正面から見据えたベルナノスの技法は、ついにはその背後に神を見出すに至るものである。『名前のない物語』と『田舎司祭の日記』に描かれている母娘のあり方にもまた、この両者の違いは表れているといえるだろう。

註

- 1) Voir Frédéric LEFÈVRE, «Interview de 1926 par Frédéric Lefèvre», in BERNANOS, *Essais et écrits de combat*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1971, pp. 1038-1048. 訳出にあたっては神戸仁彦による邦訳『ジョルジュ・ベルナノスの一時間』（『ベルナノス作品集』第1巻, 春秋社, 1976年）を参照した。
- 2) 『田舎司祭の日記』のテキストとしてはプレイアッド版『小説集』（Georges BERNANOS, *Œuvres romanesques*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1962）を使用し、同版からの引用については、そのページ数のみを [] 内に記す。訳出にあたっては渡辺一民による邦訳（『ベルナノス作品集』第2巻, 春秋社, 1977年）を参照した。また『名前のない物語』のテキストとしてはプレイアッド版『小説集』第2巻（Jules BARBEY D'AUREVILLY, *Œuvres romanesques complètes II*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1966）を使用し、同版からの引用はページ数のみを [] 内に記す。なお、ベルナノスとバルベール・ドールヴィイの引用を区別するために、バルベール・ドールヴィイの場合は [] 内のページ数の前にBをつけ加えた。
- 3) Voir Magdalena WANDZIOCH, *Le Romanesque horrifiant de Barbey d'Aurevilly*, Paris: Nizet, 1991, pp. 18-21.
- 4) 処女懐胎というイマージュは『魔性の女たち』のうち的一篇「ドン・ジュアンの最も美しい恋」にも見られる。ドン・ジュアンの異名をとったラヴィラの若い時期の愛人であった美貌の侯爵夫人には、敬虔で醜い娘がいた。娘はある夜、運悪くラヴィラの座ったばかりの椅子に腰かけてしまい、火のなかに落とされたように感じて受胎を確信する（voir BARBEY D'AUREVILLY, *Le plus bel amour de Don Juan*, in *Œuvres romanesques complètes II*, *op. cit.*, p. 78）。
- 5) ジャック・プチは、バルベール・ドールヴィイの描く女性は〈スフィンクス的な女性〉、矛盾した性格を併せ持つ謎めいた存在であるとしている。バルベール・ドールヴィイは女性たちの相矛盾する性格にけっして分析のメスを入れようとしない。なぜならラストニーの妊娠がそうであるように、そこには秘密など存在せぬからである（voir Jacques PETIT, *Essais de lectures des «Diaboliques» de Barbey d'Aurevilly*, Paris:

Lettres Modernes Minard, coll. «Situation», 1974, pp. 101-104)。

- 6) ヘルマン・ホーファーはベルナノスが子供時代を聖寵の時代として描いているのにたいして、バルベール・ドールヴィイはけっしてその時代に魂の救済につながる力を与えていないと主張する (voir Herman HOFER, «Bernanos Aurevillien, Barbey Bernanosien», in *Barbey d'Aurevilly 6*, Paris: lettres Modernes Minard, 1971, pp. 61-62)。
- 7) Voir Albert BÉGUIN, *Bernanos*, Paris: Éd. du Seuil, coll. «Écrivains de toujours», 1954, pp. 74-75.
- 8) Voir BARBEY D'AUREVILLY, *Le Dessous de cartes d'une partie de whist*, in *Œuvres romanesques complètes II*, *op. cit.*, p. 133. なお、訳出にあたっては秋山和夫による邦訳 (『魔性の女たち』, 国書刊行会「世界幻想文学大系」第8巻, 1975年) を参照した。